

保育・教科部会の成果と課題

1 はじめに

本学校園では、幼小中一貫教育の11年間の学びを通して、「確かな学力」の育成をめざし豊かな「学び」をつくる子どもの姿の実現に向けて、思考力・判断力・表現力の育成に焦点をあてて研究してきた。問題解決の過程において子ども同士がかかわり合うことは、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりする上で有効にはたらくことがわかり、これを「学び合い」と定義した。昨年度の研究で、学級全体での学び合いを成立させるためには、活動や単元におけるねらいを明確にし、そのねらいに沿った全体の構想の中で学び合いを位置づけていくことが大切であることや、学び合いの場面での教師のはたらきかけはどんなものが有効かがわかった。今年度は、昨年度の研究をふまえ、よりよい学び合いとなるための活動や単元の構想や、教師のはたらきかけについてさらに深めるとともに、学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価についての検証をすることにした。

2 保育・教科部会の成果

(1) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

①思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための単元構成について

今年度の研究で、思考力・判断力・表現力を育成するための学級全体での学び合いを成立させるために、一人ひとりの子どもに考えさせたり、課題に対する自分の思いを明らかにさせたりしておくことの重要性が明らかになってきた。幼稚園では、学級全体での学び合いの素地として、学級のみならずと触れ合うこと、みんなと一緒にしたという思いを大事にして、みんなに伝えたいという思いをもたせられるようにした。そして、子どもたちは遊びの中で思いを伝え合うことで、自分の考えを確かにしたり、友だちの思いを受け止めたりしていく経験を積み重ねることができた。音楽科では、楽曲の特徴やよさなど、思考・判断したことを言葉を媒体として伝え合うことで、学びの質を互いに高め合うことのできる課題や場面を積極的に設け、「聴きたい」「歌いたい」「自分はこうしたい」と意欲を高めることを大切にした。外国語活動・英語科では、基礎・基本の定着や技能の習得は主に生徒一人ひとりの個の学びによるところが大きいが、この部分がしっかりしていないまま学び合いを行ったとしても、その知識や技能をうまく活用することができず、学びは深まらないと教科構想で述べている。社会科では、意見形成を強固なものにするために、意見交流の中で新しい見方・考え方にふれ、自分の考えに揺れを感じたり、自分の考えの確かさに自信をもち、あらためて自分の考えを見つめ再構成するまでの過程を「第1の学び合い」とし、個にかえり自分の考えを再構成する場面を設け、意見形成を強固にした形で、新しい見方・考え方と自分の考えとのかかわりについてより深く考えて、練られたものを表現する「第2の学び合い」を設定することにした。中学3年の実践では、良いルールについて考える公民の学習で、「第1の学び合い」後と「第2の学び合い」後での子どもの認識の深まりが見てとれ、個々の子どもの主張が根拠をもちしっかりしたものであったことが、多様な考えを調整することの重要性に気づくことにつながったのではないかとまとめている。

昨年度の研究では、学び合いを活動や単元全体の中でどう位置づけるかが大切であることがわかったが、それは、個々の子どもに確かな自分の考えをもたせた上で学び合いの場を設定することに他ならない。初等部前期では、教師と子どもの1対1の関係が大切で、子どもは認められているという安心感の中で、自分の考えを確かにもつようになる。初等部後期からは、ペア学習やグループ学習が可能になる。子どもは、相手を意識しながら自分の考えが伝わるように思考しながら表現する中で、より確かに自分の考えをもつようになる。このペア学習やグループ学習のほかにも、発達段階に応じた個々の子どもに自分の考えを確かにもたせるため手だては様々であるが、思考力・判断力・表現力を育成する学級全体の学び合いを成立させるための、大事な要素と言えるであろう。

②思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための教師のはたらきかけについて

学び合いの場面で、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけが有効であることが、昨年度の研究でわかっており、今年度は各教科・保育でさらに追求した。算数・数学科では、自分が予想したこ

とや他人が考えたことについて「なぜそうなるのか」と、これまでに習得した知識や技能、数学的な考え方をを用いた説明を促し、さらに学び合いを活性化させるための問いや授業のねらいに迫っていくような問いを意図的に投げかけていくようにした。体育・保健体育科では、子どもが伝えたいことをより明確にし、全体が共有できるように考えを掘り下げたり、自分や仲間の追求のよさを感じながら学びを進めていけるように価値づけることで、よい動きのイメージをもちながら運動をすることができるようにはたらきかけた。小学4年体育の実践で、運動の視点を焦点化したことにより、子どもたちは運動のこつに気づき、記録を大きく伸ばした。さらに、子どもの考えを掘り下げていくことにより、考えがより具体的になっていき、子どもたちの中で運動のポイントが共有できるものとなり、ボール操作技能を高めていくことができたとまとめている。

子どもにかかわり合いをもたせることは、思考力・判断力・表現力の育成に有効であったことから、学び合いの場を活動や単元構成の中で位置づけてきた。しかし、かかわり合いの場を設定すれば、思考力・判断力・表現力が育成されるわけではない。学び合いの場で、教師が子どもに何を思考させたいのか何を発容させたいのか明確な視点をもち、子どもをとらえて、思考させたいことを「掘り下げたり」「提案したり」することによって、子どもの思考は深まり、発容する。子どもに思考させたい視点は、活動や単元のねらいにせまるもので、活動や単元を貫く柱につながっていると考えられる。

(2) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

各教科・保育の実践では、学級全体の学び合いの場面での思考力・判断力・表現力について、具体的な評価規準・評価基準を設定し評価をした。しかし、1時間の活動や学習で子どもの学びが大きく発容することがあっても、思考力・判断力・表現力が1時間で大きく変わることはないと考え、単元を通して思考力・判断力・表現力の高まりを評価をすることにした教科が多い。思考力・判断力・表現力を評価する評価資料は、言葉・式・図・表・絵・グラフなどを使用した発言や記述によるもので、作品やレポート、日記やふりかえりやイメージマップなど様々なものがある。一人ひとりの子どもを評価することは容易なことではない。しかし、評価基準に基づいて一人ひとりの分析を行ったことは、子どもの思考やその発容を的確にとらえることになり、学び合いの場面でははたらきかけにいかすことに役だった。

子どものふりかえりや自己評価は、子ども自身が自分の発容を認識することにもつながった。国語科では、初発の読みと最終的に個にかえていった読みとを自己の中で明確にするための書く活動、話す活動によって、自己の読みの変容を自覚させるようにした。美術科では、作品から見取ることのできる造形表現の変遷を画像により集積し、表現主題に沿った発想や構想を図示や言語化により集積したポートフォリオによる評価を行うことにより、子ども自身が自分の学びの高まりをとらえられる手だてとした。中学3年理科の実践では、自己の学習前・後における発容を可視的な形で自己評価させたところ、「仕組みが分かった」「考え方がわかった」「根拠を基に説明できた」など、思考力・判断力・表現力が高まったと考えられる記述が多く見られたとまとめている。子どもが自らの学びの変容を認識することによって、学びの意味を自覚することになった。

幼稚園教育要領解説では、「反省や評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」としていることから、幼稚園では評価という語は使わず、「見取りと価値づけの観点」とし、保育をよりよいものに改善するための手がかりを求めるものとした。中央教育審議会初等中等教育課程部会（2010）「児童生徒の学習評価のあり方について（報告）」には、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である。」と述べられており、学び合いの評価を、授業改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善に役立てるものにしたと考えている。

3 今後の課題

中学2年の技術家庭科の実践において、学び合いにも段階があり、子どもが相互に揺さぶり合いながら自ら学び合おうとする形態を追求していく段階にきているのではないかとまとめている。幼小中一貫した全ての教科・保育の取り組みによって、思考力・判断力・表現力が子どもの確かな学力となったとするならば、次は子どもたちが自ら学びを切り拓いていくにはどうしたらよいかの検討をして行く必要がある。（文責 高橋 里美）